

被服構成学の生成

—教育の変遷から見る被服構成学へのアプローチ—

福 山 和 子

- 序
- 家庭教育による裁縫教育の系譜
- 職人教育による裁縫教育の系譜
- 学校教育による裁縫教育の系譜

序

被服構成の発展ならびに被服構成学の生成を論ずる場合、材料及び着装形態の発展に注視するもの、手段の変遷に重点を置くもの、社会的情勢の変化に着眼する三つの立場が考えられるとして来た。被服構成の生成は絶える事のない人間生活の一断面を継続的にとらえて流れとして理解しなければならない。すなわち被服構成に対する正しい理解はその成立発展の歴史的過程の考察を抜きにしては、不可能であると思われる。被服構成学はその学問的向上の途を自然科学的アプローチ、手法に求め、その学問的体系を急ぐあまり本来の実践的目的よりもとくに自然科学的な方法論の摂取にかたよったきらいがあった。その反面、前科学的な技術第一主義の無体系的な縫製技術が存在しこの二つの両極的な現実において被服構成学の学問的体系化と統一化がなされようとしている。その被服構成学の体系化の中に被服構成教育史は一つの重要な領域をなすものである。そしてそこに被服構成学の両極的な現実の問題点を見ることができ、これらの問題点の背景をなすものの1つとして縫製担当者の教育活動の変遷を指摘することができよう。また更に根源的な問題としてそれらの教育者が受けてきた裁縫教育の中に現在の両極的状况を生みだした要因を見出すことができる。被服構成教育は経験と職人的熟練の伝習の上になりたっていた。それが洋装教育の輸入、機械の輸入発達により縫製技術が合理化

され職人的技能教育から科学的基礎に立つ教育法に変わって来た訳であるが、歴史は構成教育に幾多の変遷を要求し教育法は時代背景を注視する事なくしては考察出来得ないのである。被服構成教育史の研究の必要性はそれによる現状分析のよりどころまたは将来の方向づけにも波及するものと考えらる。

家庭教育による裁縫教育の系譜

- 母親、乳母による家庭伝習
- 「躰」としての裁縫

狩猟や漁撈が主な生業であった時代から、原始的農耕の時代になってくると衣服の縫製は女子の専業となる。農業が主要な生業となることにより、女子は農業生産の労働力となっていた一方機織、裁縫のすぐれた技術者であった。その技術は労働力として価値づけられ、家族から家族へ、集団から集団へ伝習されていった。これが縫製技術の家庭伝習の母胎である。その後大宝律令に家族制度が制定され、女性の地位、夫婦、長幼の関係を中国的、儒教的道徳で規定されるようになる。奈良・平安時代を通じて貴族以下富裕者の夫人や娘たちは直接機織、裁縫をしないで侍女、召使いにさせたが、家庭の女性はそれに対する知識と技術は充分持っていなければならなかった。女子教育として習字、音

表1 平安時代女子教育の内容と裁縫

教育内容	教育担当者	裁縫に関する資料と内容
音楽	乳母	万葉集—裁縫は女子の専業
和歌		源氏物語—宮中に仕えた女房達の女の道として裁縫をたしなむ
書道	侍女	枕草子—裁縫技術とそれによってつちかわれる根気強さ等の精神性
裁縫		蜻蛉日記—当時の婦人の才能の要素の一つとして裁縫を位置づけ

業、和歌などの芸術的教育の面が重んじられたと同時に実用的なものとして裁縫、染色の技術面も女子の資格として認められていた。(表1参照)

(a) 蜻蛉日記の一節

さて廿日の日にこの月もな
りぬれどあとたえなり。あさ

ましきは「これして」とてふうのものあり。「御ふみありつるははやおちにけり」といへば「おろかなるようなり、かへりごとせぬにてあらん」とてなにごともしらでやみぬ。ありしものどもはしてふみもなくてものしつ。そのちゆめのかよひちたえてとしくればてぬ。つもごりにまた「これしてとなん」とて、はては、ふみだにもなうてぞ、したがさねある。いかにせましとおもひやすらひて、これかれにいひあはずれば「なほこのたびばかり心みにせよ、いとみたるやうにのみあればか」とさだむることありて、とどめてきたなげなくして、ついたちの日丈夫にもたせてものしたれば「いときよくなりぬとなんありつる」とてやみぬ。あさましといえはやおろかなり。

この一節で縫いもの手際良さをほめ、道綱の母をとおして、当時の婦人における才能の要素の一つとしての裁縫の位置づけをしている。

万葉集より

夏影の房の下に衣裁つ吾妹 裏設けて
吾がため裁たばや やや大に裁て 柿本人麿

逢むむ日の形見にせよと手弱女の
思い乱れて縫える衣ぞ 狭野弟上娘子

橋の島にし居れば河遠み
曝らず縫いし吾が下衣 宋 祥

吾背子が着せる衣の針日落ちず
入りにけらしも我が情さへ 阿借女郎

これらの詞から裁縫は女子の専業であったことが理解される。

貴族の男女が生産をはなれ政治をはなれて宮廷陰謀と享楽に日々を送っている時、地方には新しい生産組織がおこり、地方的勢力武士階級がおこっていった。武士の生活は武術の熟達を念願し、困苦欠乏にたえられる精神力を養うことに努めた。武士は独自の階級的自覚が生じ武

表2 女訓物にみる裁縫評価

本 名	発刊年代	作 者	裁 縫 評 価
めのとそうし		不 明	「裁縫いの道」の思想を明瞭にしている
貞節教訓女式目	宝暦4	不 明	紡ぎ、縫うのは家庭産業である
女諸礼綾錦	寛政8	北尾辰宜	績み、織、縫の道も家庭産業である
女大学宝箱	文化11	貝原益軒	縫い針は女子第一の業とする
小学操草	文化12	不 明	裁縫の業は女第一の業である
女訓孝経訓	文政年間	高 蘭 山	婦人の道は縫い事につとめる
女 実 語 教	天保年間 嘉永4	佐々間象山 池田東齋亨編	裁縫の道は常に心がけ日常の衣類を整る 裁縫の技を尊重

士独自の教育文化をそだてていった。それは女子に対しては、貞操観念と自覚の念が高まり夫婦間の道徳も発達して家の観念が明らかになる。女子は更にしとやかで貞操を守るように躰され、三従の道を説かれ優雅を徳としていた。

「貞永式目」「北条重時家訓」や一条兼良の「小夜のねざめ」や「丹州三家物語」にも儒教的道徳を強調し、その中での公家、武家、庶民の女子の裁縫教育はもっぱら家庭でおこなっていた。その教育のにない手は母親、乳母あるいは熟達者であって、この時代の裁縫教育は女性の教養「躰」として強く要求された。他の教養と同じく裁方、縫方に熟達することが要求され技芸に習熟することこそ手習い事、家訓と同様に重きがおかれた。裁縫には「三つの手きぎあり」として「めのとそうし」には「御そたちぬふこと、いやしきわざにあらざ」とあり、どんな身分であろうと裁縫は女性の第一の心得である。「まず仕立物には三つの手きぎあり」として「第一には、はやく、美しく、第二には、仕立はさほどなけれども、はやければ時のようにたち候、第三には、おそけれどもうつくしきをとり候」といい、裁縫は美しく早くできることを要求している。また伊勢貞陸の「嫁入記」「よめむかへの事」にも記され、家庭裁縫に熟達したものは専門技術を必要とする寺院用衣服まで縫った。更に、いずれの女訓物も裁縫の技を尊重し、かつ技を練ることによりて人としての殊に女子としての修養を積むことを訓えている。(表2参照)即ち「裁縫の道」によって時代の要求する女人像が作られ女子教育がなされていた。

江戸時代になって女子教育は知識の教育では

なく行としての躰を教育の生命とし家庭において父母自ら一切の指導と躰を行なっていた。女子が裁縫を稽古することは単なる技術の修練で終るのではなく女子としての躰、女子の修養の一切を意味しており、裁縫は平和的・静的作業で、縫物は女子の家族に村する深い温情から生れでる奉仕の精神を基にした強く永い忍耐と寸陰を惜しむ勤勉と綿密周到な日常生活上の心づかいから生れたものであると「女孝経」「象山女子訓」等に記され、その精神面に重きをおいていたことがうかがえる。自給自足のこの時代の農産経済を裁縫の立場からいえば織物を生産することと消費する裁縫仕立の仕事とか相互に結合していた。一般家庭の子女の裁縫は績み・紡ぎ・織り・染めに関連していた。すなわち「裁ち縫いの業」と「積み紡ぎの業」とが結びつき、「織ること」「縫うこと」「染めること」が連絡し一人が担当し、糸取り・糸操・砧打・布染め・苧績みの一連の作業は女子の担当であった。

家庭における裁縫教育が中心であった江戸時代、寺小屋・お針師匠について学ぶ家庭外教育がさかに行なわれ、裁縫教育の担い手は母親、乳母から第三者専門技術者に移っていくようになる。明治時代、以降教育機関の充実はますますその座を強くし、家庭教育の延長としての専門家教育は学校教育一斉教育へと変質していった。

職業教育による裁縫教育の系譜

- ・ 家伝としての裁縫教育
- ・ 仕立屋技術としての裁縫教育

古代社会において裁縫が労働技術として伝習された。その伝習の場は家であったが、労働力としてとらえた場合職業教育の面を多くもっていたと推定される。中国大陸と交流をもつ事により唐衣服の縫製技術を身につけた多数の女子が中国や朝鮮から帰化して官庁に奉仕し、縫殿寮・縫部司として技術伝達を行った。ある種の集団に専門技術を伝習する初期的形態である。万葉集には

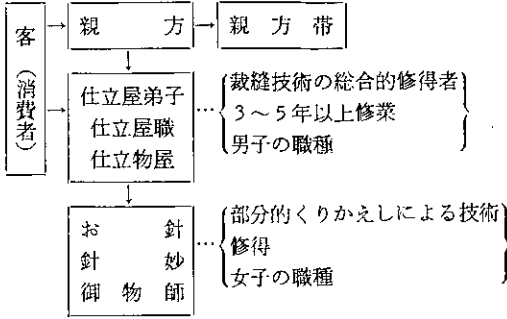
住吉の波豆麻の公が馬乗衣さひづらふ
漢女を坐えて縫える衣ぞ

柿本人麿

と宮中で漢女が裁縫していたことが理解できる。綾錦などの高級品は郡家・国庁などで男子が織って貢納し、皇室用・中央官庁用は織部司・縫殿寮・縫部司で女子が染色し縫製した。貢租用・売却用・自家消費用などの糸つむぎ・染色・機織・布ざらし・裁縫は女子の専業であった。裁ち縫いの技が当時の女子の教養として重要視されていた事は家庭伝達の所でも記したが、宮中に仕えた女房達が裁縫の道が芸術的教育面が重んじられたと同様に業として認めていたことは蜻蛉日記等にも描かれている。女房達の専門技術伝承の他に個人教授による家伝としての裁縫があげられる。家伝の教授は個人教授を意味し諸技能・木工・鋳工・織工・裁縫・染色・武芸等が上代から世襲(4)になっていた。一種の高等専門職業教育が行なわれていたのである。職業が世襲になっていた時代には子孫に直接教授することが行なわれ、特殊の技芸の学習を志すものはその道の先輩の家に通い、個人教授をうけていた。業務を家伝とし官職を世襲して氏姓にする習慣があり馬飼部・酒部・衣縫部等がある。これらの支配頭から職業教育をうけていた。

武家社会になると庶民が社会的に進出し、商人は農民・職人の生産者と武士の消費者との間にあって経済的力をつけてくる。絹織物等織物の生産が発達することにより織物業の発生を見、更に呉服商の発生をみ、裁縫・刺繍の技術が分化し、裁縫では針賃女房や仕立屋、刺繍では縫物師が独立してきた。裁縫は機織・染色と同様に女子労働力とみなされ一般の小袖等は女子の手によって縫製され縫製作業を中心とする仕立業が成立していった。更に複雑な身分制度は世襲制度によって固定化し専門技術者を養成していったが、強制世襲制度は技術の発展を期待することはできず、裁縫技術者(仕立屋)にとって新しい縫製方法を工夫することは望まれもしなかった。しかし町人達の社会的進出と自由な生活は新しい裁縫技術を発展させる母胎とな

表3 仕立屋組織



っていった。江戸幕府成立以前、裁ち縫いの技術は祖先から承継いだ方法であったが、町人の社会的進出は京都風仕立の普及、裁縫書物の刊行等新しい裁縫技術を要求していった。裁縫技術や新しい方法を研究し工夫したのは寺小屋・お針師匠ではなく仕立屋であった所に、新技術の発展の場として注目しておかなければならない。お針師匠は衣類の仕立の改善向上にはむしろ保守的で、裁縫の技術を研究し新しい仕立法を創案したのは経済力と結びついた仕立屋であった。家業としての仕立屋は「物縫い屋」「万物縫仕立屋」「仕立物屋」「衣屋」等があり、衣類の仕立に従事した者は御針・針妙・御物師・仕立屋親方・仕立屋弟子・仕立屋職であり、仕立屋仕立物屋は男であり、実際に仕立にたずさわるのはお針・針妙・御物師の女子であった。

(表3参照) お針・針妙等になるための教育方法は部分的作業のくり返しにより技術を修得する方法がとられていた。この方法は兼業として呉服屋においても行なわれていた。

明治時代になって学校教育が勃興し裁縫教育が盛んになるにつれて仕立屋による教育は衰微していった。仕立屋の作業は専門に分かれ「へら付」「裁方」を担当する職人と裁つものを縫う専門の縫子に別れていたために積方・裁方・縫方が総合的に仕込まれず修業の方法を教育過程とみるならば非教育的であった。それはいかにすれば裁縫能力を培うことができるかという工夫・合理化や創意がみられず無意味な手先の反復練習が強かった。しかしこの教育法は学校裁縫教育の初期段階であるお針師匠や仕立屋

師匠による指導にもみられ、仕立屋式裁縫教育への不信が学校裁縫教育への新しい方法の期待への根源となっていた。

職業技術教育が学校専門技術教育として取りあげられたのは明治19年共立女子職業学校(表6参照)が先駆であり、女子の職業的手技の訓練をし職業的準備を意図したものであった。ここでは裁縫だけではなく編物・刺繍・造花等と同列に位置されていた。その後幾多の専門職業学校が設立されていったが、裁縫教育に大きく影響したのは西洋洋服の導入による洋服裁縫の新技術の輸入である。更にそれは新繊維の誕生と発達、縫製作業の機械化等めまぐるしい社会状況の流れの中で発展し新技術を吸収創案していった。第二次大戦後、新教育令により各種学校の設立、洋裁学校・和裁・編物・技芸等を発展充実させ裁縫技術の先駆者を世に送り出していった。

わが国の洋裁教育はほとんどが仕立屋業としての職人教育によってはじめられた。明治維新以降、欧米文化の導入により洋服の輸入がなされ、その調製の必要性から洋裁技術の開拓がはじまった。当時の洋服裁縫の技術は西欧のものを直輸入し、模倣しながら吸収する段階であったから入手した原書・訳書等の教授書は稀少なものであった。それらの内容のほとんどが男子服であったことから、当時の女子・子供服の型紙裁断による裁縫技術の基盤は男子服にあったことを示している。明治30年以降になると女子の裁縫専門学校で洋裁が教授され、明治34年頃には洋裁教授書も社会の要求に応じたものが発刊され、主に女子の裁縫教育を目的とするもの^(a)と男子服専門の子弟養成の職業的教育を目的とする傾向のもの^(b)に大きくわけられる。西洋裁縫教授書は今日わが国における洋裁技術の素地を形成したと思われる。昭和18年以降新学制により専門技術学校として洋裁・和裁専門学校が設立され技術教育が施されるに到った。しかしその教育方法には研究開発の多くの道を残しながらも、今だに多くは仕立屋業としての伝習方法が存在しており、固定化された型紙教育、

順序化された縫製作業等はその一例として見る
ことができるのではないだろうか。

学校教育による裁縫教育の系譜

- お針師匠・寺小屋による裁縫教育
- 良妻賢母、女子の価値評価の裁縫教育
- 学校教育機関による裁縫教育
- 家庭科・家政学の一分野としての裁縫教育

仏教の隆盛によって造寺・造仏とそれに伴う
美術・工芸・楽の発達をみた奈良時代、その発
展の基礎は教育の力によるものである。文化が
発達すれば教育の内容が豊富になり理想が向上
し教育制度が確立していく。奈良時代の教育は
制度上に現われた官設学校と学者の私塾と家
学・家伝の個人教授の三方面にわかれていた。
裁縫はその中で技術として家伝教育をうけたこ
とは職業教育の所に記した。文化を創造し享楽
をほしいままにしていた貴族社会において、教
育機関は官設・私設があり、この階級のみが独
占し一般民衆から遠ざかっていた。地理的条件
と貴族階級の教育機関の独占は大多数の民衆を
教育機関の圏外においていたが、私塾あるいは
家庭で家学・家伝の伝授によって美術・工芸の
すぐれたものを生みだしていった。貴族階級の
娘たちは女御や中宮になり、宮仕えをする目的
で教養を身につけた。その教養は道徳的および
宗教的教養と文学的教養が重んぜられており、
裁縫教育は家庭において母や乳母が担当した。

武士の時代になると政治機構は簡素で現実に
即した実際の処理を重んじた封建制社会組織が
成立し、文弱を戒め質素を重んじて武士道を励
まし、租税を軽減し公政な政治を行っていた。
武士は為政者であるという自覚から漸く組
織的教育を要求するようになってきた。公私教
育の目標「武士道」は死生一如の忠実質剛健・
尚武勇敢・礼義・廉恥・約束の厳守・清廉潔
白・秩序の尊重である。修身書「十訓抄」には
人倫の教え・処世訓・精神修養等武士の生活原
理を示している。室町時代に入って民衆が勃興
してきたとはいえ家庭で子女を教育する能力の

あるものはごく少なかった。したがって経済力
の許す家庭ではおおかた寺に依頼して子女を寄
宿せしめ、師僧と寝食を共にし生活即教育とし
て徳育を含めて教育がなされた。寺院が教育機
関となり後の寺小屋のおこりである。「多胡辰
敬家訓」に家庭における学習の内容は手習い学
問の事・弓の事・算用の事・乗馬の事・医師の
事・連歌の事・庖丁の事・乱舞の事・鞠の事・
しつけの事・細工の事・花の事・兵法の事・す
まふの事・容儀の事等について詳細な説明を加
えながら教訓した。武家の家訓は武士道に結び
ついた儒教・仏教の道徳を強調し、他面学問の
必要をとき家訓にもとづいて躰を施した。庶民
教育は社会的に進出し処する庶民生活に必要な
初歩の知識技能を身につけさせるのが目的であ
った。裁縫教育は家庭で躰の教育として行って
いた。

裁縫が学校教育らしく取りあげられるよう
になったのは江戸時代に入ってからである。幕藩
体制の確立とともに士・農・工・商の階級区分
ができ、武士を上位とする身分組織が成立し、
家においては家長の絶対的権力を認める家族制
度が誕生した。このような政治社会の中で町人
勢力勃興による封建社会そのものの変質がみら
れ、商工業の飛躍的進展により商人階級の経済
力が強力となり、土地経済から貨幣経済への転
換がみられ、固定した身分制度の実質的変貌を
意味している。このような社会を基礎としなが
ら複雑な身分制度は世襲制度によって固定化し
ていった。その中で教育は武士は武士のため、
庶民は庶民のため、女子は女子のための教育機
関の設立を見、女子の教育思想は儒教的女性観
「女性の活動の天地は家にあり、母たり妻たる
ことに依ってのみ女子の使命は果される」の上
に立っていた。それ故教育の内容は知識としての
教育ではなく家政・齊家に役立つ実際の訓練
や躰をすることであった。手習い・歌道・読書
の知識的方面と裁縫・音曲・礼式・茶道・舞踊
等の実際の訓練の面から成りたっていた。当時
の往来書「女消息往来」には「扱又平常女子の
嗜むべき芸能は手習い・縫針・躰方・歌道・活

表 4 往来物の裁縫内容

書名	著者	年代	内 容
衣服往来	菑亭主人	弘化 5	裁縫の起源, 衣服着用の心得, 衣類の種類, 綿の種類, 裁縫用具, 裁方, 裁方, 女子と裁縫等
衣裳文章	高 伴実		裁縫の起源, 社会の身分と一年中の時季に応じた衣服着用の心得
呉服往来	十返舎 重田一九	文政 8	衣服の用, 汚物洗落様, 婦女容飾具

(「家庭科教育史」常見男参考)

表 5 江戸時代裁縫書内容

書名	著者	年代	内 容
万金産業袋 第5編	三宅也来	保享 17	唐物類, 京織類, 京染, 仕入物類, 夏物類, 晒類, 並布類, 真綿類, 太物類, 寸尺並字類, 地稜の徴考並図, 裳衣の大概
網布裁要	正木正幹	宝暦 14	一巾物裁図, 1尺2寸~4寸まで裁図, 1尺5寸~6寸まで裁図, 二巾物裁図, 三巾物裁図, 小裁寸法大位, 小裁歩数知法, 小裁直段分法, 尺量法
裁縫早手引	不 詳	享和 3	一身, 産衣, 羽折, 半合羽, 長合羽, 襦袢, 宗十郎頭布, 夜具, 火事羽折, 袷羽折, ばっち, 袴, 弥右衛門裁袴, 馬乗袴, 野袴, 上下紫袍, 外幕, 円幕, 抱旗, 祭礼襦
裁縫独稽古	池田東亂亭	天保 3	衣服裁物略式, 衣服裁たざる日之事, 新小袖着初方角, 和物尺付, 裁方小袖の部, 裁方羽織の部, 裁方上下, 並袴之部, かずき裁方, 裁方ばっち, 小袖八掛裁方, 夜具裁方, 幕の乳縫様
裁物早学問	不 詳	嘉永 4	1身, 3身, 産衣, 小裁羽折, 中立羽折, 折返羽折, 単羽折, 大立着物, 襦袢, 夜具, 合羽, ばっち, 外幕, 内幕, 小旗, 着衣, 大紋並素袍, 上下, 野袴, 馬乗袴, 十徳

(「家庭教育史」常見男参考)

華・香の道・糸竹之調也」, また「富貴草」には「さてまた女は七つより手習・しまい・縫い物を心に掛けて母親の教を第一守るべし」と記され, 女の道・躰として教育が施されその一つに茶道や裁縫等が同格にあつかわれている。裁縫参考資料として当時使用されていたものに「衣服往来」「衣裳文章」「呉服往来」等があり, 多くの裁縫書の刊行もみられる。(表4, 5参照)

女子の教育機関として代表的なもの「寺小屋」は読・書・算の基本科目とならんで茶・活花・画・裁縫を女子の「たしなみ」として教科に組み入れていた。中・小商人の多くは子女をここにあずけ教育を受けさせていた。一般家庭の子女は寺小屋に通うか, お針師匠について学び, 時には武家・大商人の家庭に行儀見習いによって女の道を修養した。家庭においては母や姉から家事を処理するための実技の教えを受けていた。お針師匠は寺小屋師匠の妻女, または女のお針屋で実用的裁縫が指導された。「女孝

糸」「唐錦」「鉄漿訓」「象山女訓」の女訓物では「裁縫は平和的・静的作業で培えた縫物は女性の家庭に対する深い温情から生れでる奉仕の精神を基にした。強く永い忍耐と寸陰を惜しむ勤勉と綿密周到な日常生活上の心づかいから生れてたものである」と儒教的精神での裁縫のあり方を説いている。他の女訓物(表2参照)にも精神を技術の一体化がみられる。裁縫は実際に身をもって針をもって習い憶える方法がとられていたため裁縫書の発刊がおくれたが, 大阪・京風の裁縫が江戸に入った折に「網布裁要」「万金産業袋」が刊行されたのにはじまる。(表5参照)

裁縫書が刊行されたということは裁縫技術を合理化し統一普及させ, 裁縫教育の新しい段階があったと考える。それまでは作業の反復練習による技術修得が裁縫書による模放練習による技術修得となり裁縫教育の合理化を意味し, 更にお針師匠の質の低下と時代の推移と文化の発達につれて女子教育に対する新しい教育理念が

抬頭し、従来のお針師匠の教育能力が批判の対象となっていた。

明治維新後、新学制がひかれ女子に学校教育の門が開かれた。女子に対する学校教育への着想は伝統的な考え方から生れたものではなく、外国事情の紹介を媒介として生れたものとして考えられる。しかしそこには女子もまた男子と同じ人間であるが故に学校教育を受けるべきだし、受けさせるべきだという考え方と、男子も女子もそれぞれに職分があるのでその職分を十分に果たすためには、女子も男子と同様に教育を受けさせるべきだという女子教育の発想の矛盾がみられる。衣服裁縫の技に習熟することは、女子にとって不可欠かつ重要な教養であり、裁縫が巧みであるか否かによって女子の価値を評価したこの時代、裁縫の修練は女子教育の核心をなすものであり、技能の習熟は⁽⁶⁾いわゆる婦徳の涵養に重要な役割を果たしていた。この女子教育思想は明治時代に入って女子教育の名目のもとに「良妻賢母」を女子の理想とし、その重要な要素として裁縫教育が行なわれるに至った。故に裁縫教育の要旨は衣服裁縫の技能の練成に力を注ぐと共に、節約利用の習慣を養い女子に必要な徳性を涵養することであり、その基本的性格は裁縫技能の伝授を中心とする技能教育であるが、それは女子教育の歴史的背景の中で家族主義的良妻賢母の育成教育の性格をもったのであった。

小学における裁縫教育（表6参照）

明治5年、学制に小学中女児小学には家庭生活に関する教科として手芸が加えられ学校における裁縫教育の胞芽がみられる。明治12年教育令発布、「女子の爲めには裁縫等の科を設くべし」とし、女子に裁縫・家事経済が加えられ、ここに学校教育において裁縫科の名称が用いられる。明治24年小学校教則に裁縫科の教育的意義が明らかにされ、裁縫用具が校具として設備される。戦後の日本の学制に大改革が行なわれるまで約70年間、一貫して良妻賢母の精神の元で、女子のためには特に裁縫家事科を課するという伝統が固く守られてきた。昭和10年家事科

と裁縫科を併せて家事・裁縫科となり、昭和14年に家庭科という名称が用いられる。昭和16年国民学校令の実施にともない、芸能科の一分科となり芸能科裁縫と称するようになる。昭和22年新学制により家庭科の一分科となる。

中学における裁縫教育（表6参照）

明治6年以来設立された女学校に、京都女学校・跡見女学校・栃木女学校・東京高等女学校があり、いずれも高等女学校における裁縫教育の目標を明らかにし、家事と裁縫を分離し、裁縫は全科中最も多くの時間をしめ、裁縫に徳育や知育が強調された。東京高等女学校や京都女学校では西洋婦人による西洋裁縫が教授される一方、和服裁縫の場合は仕立屋仕込みの優秀な人物が指導にあたった。普通教育が普及し算術を教えるようになって、これを裁方に応用し理解させる「積り方教授」法が、裁縫教育の一斉教授の新しい形態となっていた。更に部分縫いと雛形教授が実施され一斉教授への教授法の研究がすすめられ、従来の仕立屋学習への無計画な個人教授と盲目的技術模倣への改革がなされていった。明治28年高等女学校規定により家事・裁縫・手芸が課せられ、明治36年高等女学校教授要目に家事・裁縫・手芸が挙げられる。明治初頭以来男子と対等の教育を施そうとした進歩的な女子教育普通科重要視は学ぶ者が少なく女性の特殊教科との折衷型を生み、家庭婦人の教養科目裁縫・礼節・家政等が教授要目に加えられるにいたった。

高等専門教育における裁縫教育（表6参照）

明治7年女子師範学校では女子教育者の資質を練成、裁縫指導に関する研究が課せられ裁縫指導者を育成し、それまでの仕立屋方式に変わる教育専門研究者を教官としていく方向がとられる。明治43年高等女学校専攻科が設けられ、中学校、高等女学校の教育目的より一層実際の教育を広く施すことを目標とし裁縫が主要科目となる。それまで家事科・裁縫科について専門学校令が適用されず、日本女子大学に家政学部をおいただけに裁縫科をおいた所がなかった。これは文部省は専門学校令第一条に「高等の学

術・技芸を教授する学校を専門学校とす」に対し「裁縫はこれに該当せず」で裁縫専門学校の設立が困難であったためであった。それは裁縫に関する科学的研究、補助学科の整備がされておらなかったために高等専門教育としての評価を受けていなかったのである。明治末期・大正期にかけて関連学科の整理、教育体系をととのえることにより、裁縫女学校や職業学校の高等師範科を専門学校に改編していった。大正9年高等女学校令の改正により、家事・裁縫教育を教科課程の中心とし、良妻賢母主義教育方針が再確認される。更に家事科・裁縫科は家政上の技術就中裁縫の習得に極端な教育価値がおかれた。昭和2年に政府は職業教育の普及徹底を目的として技術教育を奨励したが、主婦教育・良妻賢母主義教育が女子教育の本筋であるとする目的と矛盾を含んでいた。また家事科・裁縫科・手芸科がそれぞれ分科されたがそれぞれの科が総合的にいかなる教育的使命を担っているのかは明らかにされず技術の習得のみに教育的価値をみいだそうとしていた。

昭和期に入ると、家事科・裁縫科・手芸科を家庭経営の趣旨から「家事及び裁縫科」となったのが昭和10年の事である。昭和12年従来衣類の

製作は裁縫科が担当し衣類の手入れ・保存は家事科が担当するという不合理を解消し「裁縫は衣類の手入れ・保存・洗たく等と緊密に連絡して取り扱うべし」(文部省令第23号)⁽⁶⁾とされ裁縫教材の統一が行なわれる。しかし家庭経営の高い立場からの統合ではなく家事的教材の移項にしかすぎなかった。昭和14年家事及び裁縫科は家庭科と改正されたが内容は家事教材と裁縫教材を寄せ集めて家庭科という新しい教科名でとりあつかったにすぎなかったが、女子教育の中心が裁縫教育だけに重きをおかれていたものから家庭全体を女子教育の対象としようとする動きを見ることができる。戦時体制下では国民精神総同員のもとで「青少年体位向上」「国栄養」「消費節約」「資源愛護」「母性保護」の精神で家庭科は最も緊密な関連あるとして協力が要請され、「家事科報国」「裁縫科報国」としての実践が行なわれるに到った。昭和18年学制改革により高等女学校および師範学校における家庭科は専門学校程度になり、中学・高等女学校・実業学校は中等学校となり、裁縫科・家事科は家政科と改称され、裁縫は被服と呼ばれ、家政科被服と呼ばれる。昭和22年新学制により新しい家庭科のあり方が問われ、家庭生活の向上発展に

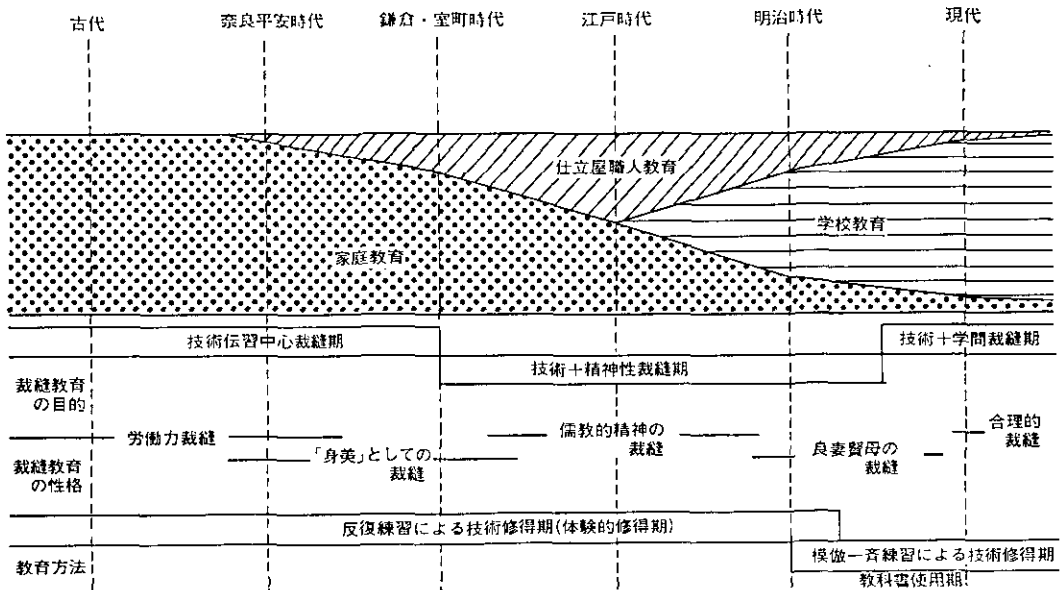


図1 被服裁縫教育の時代的形態

必要な理解・態度・技能を育成し家庭生活を改善する責任を自覚させることが目的となり、被服は裁縫技術の習得のみにとどまらず、衣類全般に関する常識を養い母たる徳性を涵養させることとした。昭和22年家政学部が大学教育の学部として独立、家政科の中の一分野としての被服が研究され、衣服に関する全般を科学的に研究し、縫製だけではなく総合的に学問としてあつかわれるに至った。しかし現在の大学教育における裁縫教育が社会の変化に伴ない内容性格の変化を要求しつつある。横田カメヨ・菅原はな子両史の資料「被服専門学科の学習に対する学生の期待」によると、被服科へ進学した学生の抱負とか目標とは啓蒙的経験の過程を経て到着したものよりは女子の天職的必要意識にもとづくものである場合が多い⁽⁹⁾。被服技術が家庭生活技術の中で重要な位置を占めているが、その「必要性」において学生自身の自覚や意識と家庭における被服担当者の意識に大きな差が生じてきている。それは生活技術としての被服製作の性格が変化しつつあるからで、江戸時代からの家庭で1人の担当者が材料・裁方・縫い方の一連の作業をする作業内容から大量生産による被服技術の躍進的発展によって既製衣料品は品質を向上し、内容は豊富・安価に提供され、家庭内での被服担当者の製作の必要度は次第に減少しつつある。それは和裁・洋裁を一通りしたと同時に被服デザイン・手芸を学びたいという学生が30%⁽¹⁰⁾いることから理解できる。被服の工場生産がますます発展すれば家庭内における縫製はやがて全く手工芸的性格に変化し、その内容に家庭被服製作の特性を発展させていくことになるのではないだろうか。短大教育における職業教育としての学生の期待は、洋裁・和裁の技能に対して20%程度である⁽¹¹⁾。短大教育が専門職能教育の一面を有する教育機関であるから被服教育もその役割をはたさねばならない。しかし2カ年で技術を取得することは困難であるが、職業となりえるような能力の基礎を十分に培うことができよう。短期大学教育機関に例をとったが、被服縫製教育は将来必要に応じて

製作することができる能力・基礎的知識・技術・理解と応用力・創造性・科学的思考判断力等の能力及び研究能度の育成こそ重要である。大学教育における縫製教育、被服材料・衣料品の大量生産、社会の被服に対する価値の変化等、現状と将来の見通しの上に乗って被服教育の核心を見定めそのあり方を追求しなければならぬ段階にきている。

裁縫教育が女性の教養「媛」として要求された時代には技術に習熟することのみに専念した。それは裁縫教育に精神性を問いながらも反復練習による個人教育に終わった。すなわち教育の場がほとんどの場合、家庭であり母親あるいは乳母がその指導にあたったことは、裁縫技術には進歩がなく技術の模倣にすぎなかったといえる。しかし、母親を通じた裁縫教育は人間性の交流においては一斉授業の形態をとる学校教育における初期の裁縫が課せられた精神主義よりは十分な役目をはたしてきたと考えられるのが至当であろう。更に裁縫教育が儒教的精神によって女性の「たしなみ」としてなされていた時代においても技術教育に終始していた。という事はお針師匠による教授法は反復による技術習得であり、いかに合理的に縫うかという工夫の余地があまりなく前時代からの技術の伝承にすぎなかった。近世裁縫教育の芽がここにあったため、昭和20年の新学制が発表されるまで学校においては技術教育が主流をなしていたのである。これは現代の被服構成学の目的とする被服総合教育を困難にならしめた。すなわち、縫う作業はお針師匠に、保存・洗たくは母親という訳で、教師が総合的に教育する場がなかった。更に女性の人間としての評価は「何を」「どれだけ早く」「きれいに」仕上げるかという価値観が一般的であったゆえに、裁縫が婦徳の涵養のパロメーターとされていたのである。更に良妻賢母の規準としての裁縫技術となり、技術中心主義への道を歩んでいったのは前述の通りである。女性に裁縫教育がなされて以来、裁縫教育の基本的性格を省みる時、それは裁縫技能

の伝授を中心とする技能教育であった。それは女子教育がなされる歴史的背景の中で家族主義的良妻賢母の育成の性格をもったものであったと言えよう。戦後、学校教育に裁縫という名称はなくなった。だが、それまで女子教育を支配してきた家族主義的観念は家庭生活の中に潜在し、生活意識や日々の生活に根強く作用していた。その様な状況の中で被服科は家政学の一領域としてその位置づけを設定しつつ、また他面被服科自身の本質的な問題研究と理念の樹立をはかった。そして被服教育の目標は技術の伝授から知識技能の習得と共に衣生活を合理化する能力や態度を養い、近代的な教養や徳性の涵養へと変わった。女子が主体的な人間として教養を身につけ、人間らしく生きてゆくために高等教育が必要である。そしてその中で求められるものは高度の専門化した商品知識、また知的な家事能力、家庭そのものが社会に存在する意義等の理解である。その様な高等教育に対する要請の中で被服学はその重要意義をもつものと考えなければならない。主婦は家政学的知識はなくても生活の知恵として処生術を心得ていたが、現代社会においてはそれだけでは処理できない多角な要求、知識の高度化が要求されてきた。そこに家政学の意義が認識される必然性があり、被服教育の必要性があげられる。

被服教育は家庭生活に必要な技術教育を中心としているために現実の家庭生活の要求を重点的に採りあげなければならない面と、将来の衣生活を洞察して革新的かつ指導的、立場をとらなければならない二面性をそなえている。この二つの間の大きな課題の統一に重点を置いておかなければならない所に現在の被服教育の宿命的な問題点が存在すると言えよう。そのためのアプローチとして、縫製教育において被服材料の認識と構成が中心課題であることを確認しつつ、さらにこれに加えて構成体の科学的分析とその応用性という別の側面からの追求を統一的

に把握してゆく研究態度をあげることができよう。そして以上の様な成果の上に新しい被服構成教育が成立し得るものと考えられる。

注

1. 北星短大紀要第14号「被服構成学の生成」P61.
2. 昭和女子大学学苑319号「裁縫教育の変遷(1)」牛込ちえ・大竹この、P42.
3. 同上 P43.
4. 日本教育史第3巻、長田新監修、P25.
 - (a) 「家庭独習洋服裁縫自在」小山祐三郎他著
「子供西洋服の拵へ方」松井みさ子著
「洋服裁縫の栞」福谷正吉著
「ミシン裁縫独学ビ」秦利舞子著
等
 - (b) 「洋服裁縫教科書」木村知治編
「裁縫秘術綱要」小出新次郎著
「洋服裁縫師必携書」岩村秀太郎著
等
5. 「明治初期の女子教育論」片山清一.
6. 成安女子短期大学紀要「被服教育の一考察」横田カメヨ・菅原はな子、P52.
7. 家庭科教育史、常見育男、P247.
8. 同上
9. 成安女子短期大学紀要「被服教育の一考察」横田カメヨ・菅原はな子、P54.
10. 同上 表B項、P56.
11. 同上 表C項、P56.

参 考 図 書

家政学原論	黒川喜太郎著
家庭科教育法	氏家寿子著
日本紡織技術の歴史	内田星美著
染色の歴史	三瓶考子著
日本服装史	木樽禎夫著
職人の歴史	遠藤元男著
体系日本史業書一産業史I~III	
	豊田武編
	児玉幸多編
	古島敏雄編
日本教育史	長田新監修
家庭科教育史	常見育男著
日本女性史	宮城榮昌・大井ミノブ編著
日本女性史 上・下	井上清著
家庭科教育法	山本キク著